

井上靖「貧血と花と爆弾」論

——「真物」の男たちの「熱情」——

高木伸幸

はじめに

井上靖の中篇「貧血と花と爆弾」は、『文藝春秋』昭和二十七年二月号に掲載された。その前年秋に日本初の民間放送として新日本放送（後の毎日放送）が開局し、折しもアメリカから来日中だった世界的ヴァイオリニスト、エフディ・メニューヒンの演奏を独占放送した事実取材を取った小説である。そしてその事業の中心人物として活躍する主人公のS日本放送放送部長、木谷竜太は、井上靖の友人であり、また新日本放送の初代放送部長だった小谷正一（大元へ一九一三▽—平4へ一九九三▽）をモデルとしている。¹つまり、新興新聞社が主催する闘牛大会の顛末を描いてこの作家の出世作となった「闘牛」（昭24・12『文學界』）や、ソビエトからヴァイオリニストを招聘する活動を描いた『黒い蝶』（昭30・10、新潮社）と同様に、小谷正一が手がけた事業に取材した小説の一つである。

この「貧血と花と爆弾」は、同時代評を見る限り、必ずしも好評を博したとは言えない。例えば、北原武夫は「文芸時評」²で、「題材に負けた文学」の一つとして取り上げ、「民間放送の競争などという、目下の時勢に話題としての第一線の生々しさを持つ題材をこの作品が扱っていないかつたら（中略）どの位の新鮮さがあつたらう」と記し、浅見淵は、これも「文芸時評」³で、「却々の力作」と評価しつつも、「濫作のせいだろう、へんに筆に疲れが見え、読者を夢中にさせてくれぬのが難である」と述べている。これらの指摘は、確かに本作品の一面を捉えていると言つてよい。後に福田宏年氏がその「作品の雰囲気」について、「事実を速いテンポで追いかけて行つて、一種の小気味良さを覚えさせる」（「解説」へ文春文庫『貧血と花と爆弾』昭54・9）⁴と言ひ、やや通俗的な側面から肯定的な評価を与えてはいるが、今日、読者からはほとんど忘れられ、批評家や研究者からもめったに取り上げられないこの小説は、井上

靖の作品として、やはり上々の出来とは言えないだろう。

しかし、この「貧血と花と爆弾」は、文壇デビューから五、六年の間に順次発表された小谷正一の事業に材を得た三作の一つであり、また主人公木谷をはじめとする人物造形のありかたには、井上靖の人間観を考える上で興味深いものが認められ、注目すべき作品の一つではないかと思われる。

以下、題材と作品との比較検討を中心に考察を進め、「貧血と花と爆弾」に描かれた井上靖の人間観とモチーフを考えてみたい。

一、

考察にあたって、小谷正一の事業に材を得たこの小説には、モデルがどのような形で取り入れられているのかをまず確かめておきたい。既に福田宏年氏が「解説」(文春文庫『貧血と花と爆弾』)で、「ほとんど事実そのままに描いてあり、実録小説と言ってもいいほどの作品」だと指摘してはいるが、文庫本の解説という制約もあつてか、実証的な考察は省略されている。福田氏の「解説」を確認するためにも、本稿では事実を確かめられる資料をできる限り挙げ、「貧血と花と爆弾」の本文と比較しつつ、考察を進めることにしたい。

先に結論から記すと、福田氏の指摘する通り、「貧血と花と爆弾」は「ほとんど事実そのままに描いた作品だと考えられる。もちろん

ん作者の創作と思われる部分もあるが、そうした設定はごくわずかだと言つてよい。以下、事実関係を追つてみよう。

例えば、作中において、S日本放送が「日本に於ける最初の商業放送」として開局を成功させるまでの過程を要約すると、次のようである。

まず、わずか一社のみと考えられていた「電波監理局からの大阪に於ける民間放送の電波の割当て」をめぐって、「三月の中旬、民間放送の名乗りを上げた五社に依る公聴会」が、「大手前の〇会館で開かれ」る。その結果、「A新聞社系のS日本放送とS新聞社系のもう一つの民間放送の二つが許可されることで問題は解決し」、「四月の下旬」になって、「S日本放送の成立が公式に認められた」。そして開局の目処がついた「八月二十九日」には「西宮球場」で「開業前夜祭」が行われ、「九月一日の正午」になって、ついに「S日本放送が日本最初の商業放送として、最初の音を出した」ことになっている。

これに対して、モデルとなった新日本放送の開局に至る過程は次のようである。毎日新聞(大阪版、以下同じ)の記事を通して確認する。まず昭和二十六年三月十七日付の紙面において、「民間放送聴聞会ひらく」の見出しの下に、大阪地区から民間放送申請中の「五社に対する予備免許交附の順位を決定する電波監理委員会の聴聞会」が「十六日朝十時から大阪東区の手前会館で開かれた」こ

とが報じられている。次いで四月二十二日付の紙面には、「民間放送」十六社に決る」の記事があり、全国で十六社に交附された「予備免許」について、大阪地区は朝日新聞社系の「朝日放送」と毎日新聞社系の「新日本放送」の二社に決まったことが報じられている。さらに八月二十八日付の紙面には、「新日本放送前夜祭 あす七時西宮球場」の広告が掲載されている。そして同月三十一日付の紙面に「豪華番組で第一声 新日本あすから本格放送」の大見出しが掲げられ、翌九月一日付の紙面には、この日から放送を開始した新日本放送の、正午から十時間にわたる番組表が掲載されている。

このように比較すると、作中の民間放送設立の過程が、モデルのそれをかなり忠実になぞっているのがよくわかるであろう。「聴聞会」が「公聴会」と名称を変え、「予備免許」の交附を「成立が公式に認められた」ことにしているなど、些細な相違は認められるものの、それぞれの出来事の日時はもちろん、「〇会館（大手前会館）」や「西宮球場」といった会場の設定にいたるまで、事実がほぼそのまま取り込まれている。

さらにもう一点、およそ事実とは信じがたいような一場面まで、実際の出来事に基づいていることを加えておく。

作中の「開業前夜祭」において、「仮設舞台には文字通りロボットの楽団（註、「楽器は手まねだけで、絶対に音は出さ」ない楽団）をおき、大阪のスタジオからシューベルトの未完成交響曲のレコー

ドを電波で西宮の会場へ送り、受信機で受けて、それをマイクを通して場内に放送することにした」という、いかにも印象的な場面がある。対して、新日本放送の前夜祭に關わる『毎日放送十年史』の解説を読むと、当日の『『未完成シンフォニー』の演奏は、楽員は演奏する身振りだけで、音はレコードを本社から有線で流して場内に拡声し」たことを記している。木谷が持っているという「何をやるか判らぬ妙な閃きと太々しさ」を強調したかのような場面も、驚いたことに井上の独創ではなく、事実に基づいていたのである。ただし、作中では、「当日演奏を予定したR交響楽団」が、「手違い」で出演できなくなったため、急遽木谷が打った「窮余の一策」だとされているが、そこまで事実通りかどうかはわからない。『毎日放送十年史』では、そのロボット演奏を「NJB技術の優秀さを誇示する」ための「趣向」だったと説明している。

次いで、物語のもう一方の柱、ラーネッド独占放送については、どのようなであろうか。

モデルとなったメニューヒン独占放送の顛末については、当時新日本放送の社員として現場に立ち会い、後に毎日放送開局三十周年記念番組「君はメニューヒンを聴いたか」（昭56・9・1放送）の制作も担当された田村滋氏が、「放送秘史 メニューヒンの独占放送はどうして成立したか？—小谷正一氏の賭—」（昭63・2）と題する文章で事のありさまを詳細に記している。それを参考してみた。

まず作中において、ラーネットの来朝は、「音楽界に大きい発言権を持っているボス」と形容される菅安二郎がS社に話を持ち込み、「S社との契約」という形で実現したことになる。田村氏の

文章に明らかなように、この設定はその当時「天才的音楽マネージャー」と呼ばれた「原善一郎」なる人物が、「メニューヒンを日本へ招く企画」を立て、それを「朝日新聞に持ち込」み、同社の招聘という形で実現した事実に基づいていると考えられる。つまりA社の競争相手であるS社とは、言うまでもなく毎日新聞社の競争相手である朝日新聞社にあたり、菅安二郎は原善一郎をモデルにしているのである。ちなみに、菅安二郎は「R交響楽団の理事の肩書」を持っているが、原善一郎も、当時は「関西交響楽団専務理事」の役職に就いていた。⁶

一方、ラーネット来朝の話を知った木谷は、「放送権と演奏権は、アメリカの事だから違うかも知れない」、「ラーネットの放送はうまく行けば俺の放送局で獲れるかも知れない」と考える。そして、かつてA社に在籍していた大貫敏夫が、「戦争中満洲で放送事業に携わり」、そこでラーネットのマネージャー、カルチスと知り合い、「当時ひどい悲境にあったカルチスの面倒を見て、調べてみれば多少の恩義を彼にかけている男だった」ことを知る。さっそく、木谷は大貫にカルチス宛の手紙を書かせて交渉を始め、やがてカルチスから大貫宛に「日本に於いて放送することについては一切貴殿にお

任せしよう」といった内容の返事が届く。S日本放送がラーネットの放送権を獲得していくいきさつは以上のようであるが、このような設定も、ほぼ事実通りのようである。

田村氏によると、メニューヒン演奏会の話を知った小谷正一は、「日本での演奏は朝日新聞が主催するが放送はどうなのか？演奏の権利と放送の権利は別なのではないか？」と考え、「NJB（新日本放送の略称）にダイヤルを廻させる」ための「秘策」として「メニューヒンの放送」を思いついたらしい。そこで小谷は、メニューヒンのマネージャーの「A・ストローク」が、「戦時中上海」で「仕事がなく、尾羽打ち枯らし生活にも困っていた」ところ、それを元「毎日新聞の記者」で、その当時「上海で放送局長」をしていた「岩崎愛二」に救ってもらった「因縁」があることに目をつけ、「すぐさま岩崎氏を呼び旧知のストロークとの交渉に当たらせたい」として間もなく「ストロークから岩崎氏宛OKの返事が届いた」とのことである。

実際には「上海」であったのが、「満洲」になっているような相違も認められるが、それ以外はかなり細かなところまで一致していると言つてよい。カルチスはA・ストローク、大貫敏夫は岩崎愛二といった具合に該当するモデルが存在し、そしてそれぞれが果たしている役割や立場、交渉の手順まで、きちんと対応している。付け加えれば、大貫敏夫はS日本放送に入社し、民放開設に向けて働く

ことになっているが、岩崎愛二も新日本放送の開局のために尽力した一人であった。¹⁷⁾

その他にも、田村氏の文章を通して、多くの設定が事実に基づいていることが確かめられる。

例えば、菅安二郎がカルチスの到着する直前に「頓死」してしまいい、その結果、木谷らが「カルチスとの契約をより確りしたものとする最後の仕上げには事態は昨日までよりも有利にな」ったという設定は、原善一郎がストロークの到着する日の早朝、心臓マヒで急死した事実に基づいていると考えられる。また、ラーネッドの放送用の演奏が、「東京」の「Tレコード会社のスタジオ」で行われることに決まって、東京と大阪の放送局を結ぶ「中継線」を獲得するために、土壇場になって木谷らが一苦勞する話も、ほぼ同様の事実を取り入れたものと思われる。さらには「カルチスが、戦時中日本においてS社から捨扶持^{すてふち}を貰っており、そうした事に關しては菅安二郎が仲に立っていたこと。カルチスを庇護していた人物にS社の幹部以外に、財界の遠藤五一（中略）がいること。今度のラーネッド来朝の話は、菅とカルチスとの話し合いで決まり、菅はそれを遠藤五一と相談の上で、以前のカルチスとS社の関係を尊重して、S社に持って行ったこと」と説明している人物關係についても、井上の勘違いかと思われる部分を除いて、ほぼ事実通りに記されているようである。¹⁸⁾

以上より、「貧血と花と爆弾」を「ほとんど事実そのままに描いた作品だと思做してもよいであろう。ただし、設定上の工夫から、事実を改変したと思われる部分も、幾つかは認められるのであるが、それらについては次節で述べる。いずれにしても、この作品は、当時（昭和二十七年二月）の読者にとって、前年秋の新日本放送開局およびメニューヒン独占放送を容易に想起させるものであったことは間違いない。そして主人公木谷の姿を通して、社会的に大きな話題となったその出来事の裏で大活躍した一人の男がいたらしいことを知り、興味を掻き立てられたことと思われる。そうした意味では、この作品は題材の魅力で読者に訴える性格が強く、さらには舞台裏で動いた作者の友人小谷正一を世間に知らせるといふ、ある種のニュース性を狙った小説だとも言える。例えば、放送局へ出向する以前の木谷の経歴を記した次の文章などには、井上靖のそのような狙いを窺うことができよう。

終戦後の混乱期に、彼はA社からの出向社員として傍系の夕刊新聞の編集次長の席をあてがわれ（中略）傍系の夕刊新聞を、当時簇出した夕刊新聞群の中で、適度の文化性と適度の商業主義を織り交せて、異色あるものとして売り出したのも彼であったし、その才能が認められた形でその後本社の事業部長に転ずると、当時東京のO新聞社の許に一本に纏っていた職業野球のリーグを販売政策の上からあつという間に二つに割って、A新

聞社の傘下に新しい連盟を作り上げたのも、大勢の人は動いたが結局は木谷の仕事だと言われていた。

終戦後間もなく、毎日新聞社からの出向社員として『夕刊新大阪』の創刊に功績を上げ、またプロ野球のパシフィック・リーグの創設と新球団毎日オリオンズの旗揚げにも貢献した小谷正一の経歴を、あたかも紹介するかのような文章である。これらから、読者は木谷のモデルの横顔を見たような気分させられ、ますます興味を掻き立てられたことであろう。

もっとも、こうした面白さは、題材の新鮮さが失われれば、効力を無くしてしまふものであることは言うまでもない。発表から五十年近くが経過した今日、本作品が読者からほとんど忘れられているのも、そうした意味では当然だと言えるかもしれない。北原武夫の「題材に負けた文学」という指摘は、的を射ているところがある。

しかし本作品が、題材に寄りかかっただけの小説かという点、必ずしもそうとは言えないようにも思われる。単なる「実録小説」ではないことを、以下、少し考察する。

二、

「貧血と花と爆弾」は、福田宏年氏の言うように、「実録小説と言ってもいいほどの作品」であるが、しかし決して「実録小説」そのものではない。あくまでも作者の表現意図に基づいたフィクション

の小説である。そこでまず次の設定に注目したい。

A 新聞社から木谷に放送局への出向辞令が出た一月十日、S 日本放送は「木谷の上に立つ社長と専務は未定」で社屋も建ておらず、「会社の実体もなく一人の従業員も持たない会社の、唯一の社員が木谷というわけであった」と記されている。これは本作品の中で、事実と大きく異なる数少ない設定の一つである。『毎日放送十年史』によれば、新日本放送の場合、そのスタジオと事務所を造る工事は昭和二十五年五月に早くも始められ、同年十二月十日に既に竣工している。そして同じ年の十二月十六日には創立総会が開かれ、そこで社長と重役を選出したことである。毎日新聞社から小谷正一へ出向辞令が出たのは二十六年一月一日付であったらしいから、実際にはある程度会社の機構が整った上で小谷は送られていたのである。

つまり井上靖は、作中のような設定に改めることで、木谷を、頼る者の全くない白紙の状態から出発させ、より困難な状況で民放開設という事業に取り組ませようとしているのである。さらに井上靖は、事業の日程についても、次のように変更している。

例えば、作中においてアナウンサーの入社試験は、開局まであと三カ月に迫った「六月の初め」に行われているが、実際のそれは、昭和二十六年二月二十六日付『毎日新聞』の記事から、開局より半

年以上も遡った二月二十五日に行われていたことがわかる。また作中において「第一回のテスト」が行われたのは、開局まであと一カ月に差し迫った「八月一日」に設定されているが、これも『毎日新聞』の記事によると、実際には開局の二カ月前にあたる七月八日に「第一回のテスト放送」は行われていた。さらにラーネットの放送が行われたのは、開局を成功させてから四週間後の「九月二十八日」に設定されているが、実際にメニューヒンの放送が行われたのは、開局日から二カ月近く先の十月二十二日であった。¹⁵⁾

いずれも作中の設定は、事実より時間的に短縮されている。S日本放送は、実際より短時間でアナウンサーの養成やテストに取り組みねばならず、また開局という大事業を成功させた後も、再び短い期間内にラーネット放送という、もう一つの大事業に取り組みねばならないことになっている。おそらく井上靖は、時間的制約をより厳しく加えることで、木谷をさらに困難な状況に追い込もうとしたのではないか。

そうした井上靖の意図は、木谷がA社の重役から民間放送の仕事初めて持ちかけられた際の、彼の心理状態にも窺われる。

「どう?」

と、重役に重ねて斯う言われた時、木谷は、

「結局やることになりましような。やらなければあつ方ないで

しよう」

と物憂く言った。そう答えた時既に木谷は、それをやることに心は決まっていた。自信は何もなかったが、日本に於ける最初の商業放送という仕事の困難さが、木谷を誘惑していた。

さらに物語のラスト・シーンにおいても、木谷は誘いをかけてきた淵野虎三が待つ料亭へ向かいながら、やはり次のように独白している。¹⁷⁾

今夜彼に会ったら、何となく新しく困難な仕事が彼を待っていて、いそうな気がしたが、何事もないよりあった方がいい!

木谷に民間放送の仕事に取り組む決意をさせたのは、その仕事の「困難さ」であった。そして「困難な仕事」は、木谷にとって「ないよりあった方がいい!」ものであるようだ。ここに困難な仕事に挑み、それを克服していく男を描こうとする井上靖の意図がまずは窺われると言えそうである。

なお、やや本題からそれるが、右に引用したラスト・シーンにおける木谷の独白で、一文の中に別の人物がそれぞれ「彼」で表わされ(前の「彼」が淵野、後の「彼」が木谷を指す)、読者の混乱を誘いかねない表現になっている。本作品には、こうしたお粗末と云っていいような文章が、いくつも見受けられる。また、ライバルである「S新聞社系のもう一つの民間放送」が存在するにも拘らず、木谷の放送局が「A新聞社系のS日本放送」と名付けられ、紛らわしい名称になっているのも、なんとも奇妙である。こうしたところに、

浅見淵の指摘することく、当時濫作期にあった井上靖の「筆の疲れ」が認められると言えよう。

話を戻すと、井上靖は木谷の人物像について、次のように記している。

実際に木谷自身、新しい未開拓の仕事となると、何か自分の才能の限界でも験してもするように、妙に太々しくその仕事にのめり込んで行つて、むきになって体を張るところがあった。

さらに木谷は、自分が「真物」と見做した人間、つまり「その人物が特異な能力か才能か、あるいは熱情を示す可能性を内に持っている人物」を、「いつも極限まで働かせ」、「とことんまで持っているものを曝け出させ、燃焼し尽くさせた」とも記している。木谷は、自分に対して、他人に対しても、限界まで、極限まで働きつづけることを要求する男だと言うのである。実際、木谷は民放開局に向けて、「一切お構いなしに、社員を倒れるまで使」い、自分自身も「ひどく疲れて、殆ど食事というものが喉を通らなくな」るまで働く。それはS日本放送がいざ開局し、その第一声が発せられた時、彼が次のような状態であったことから察せられる。

その最初の音の出る二分前に、彼は誰かに揺り起こされ、S日本放送にとつては歴史的なものと言うべきMアナウンサーの声を一分程聞くと、直ぐ又彼は眼りに落ちた。

このような木谷の姿勢は、全篇を通して貫かれている。困難に挑

み、その困難を、極限まで燃焼することで克服していく木谷の姿を、その木谷の持つエネルギーを、作者は終始描こうとしているのである。

ここで、木谷が「真物」の男と見做している三人の脇役の存在について触れておきたい。

まず木谷が信頼を寄せる放送技術者山根太郎¹⁹。彼は何より放送局で「一日中動き廻っている」ことで「青春の熱情」を呼び返している人間である。そして「燃え上がられば幾らでも燃え上がってどこまでも走って行くに違いない機関車のようなもの」を木谷に感じさせる。彼も、木谷と同じく、ぎりぎりのところまで働きつづける男である。

次いで、その山根を木谷に推薦した、木谷の友人三原周平¹⁹は、「ヴァイオリニストとしての自分の生涯を娘のために犠牲にして」、娘の清子を天才的ヴァイオリニストに育て上げた男である。そして、それだけでは飽き足らずに、清子がやがて産むであろう、「自分にとっては孫に当たる血塊」に「一切の芸術の夢」を託し、「三代に互つての挑まざる天分の琢磨とあらゆる努力の傾注だけが、一人の真の天才と称びうるヴァイオリニストを作るものである」と「真面目にそう思い込んでい」るような、そんな「異常な芸術的熱情」の持主である。つまるところ、三原周平は芸術の世界において、極限に挑んでいる人間と云うことができよう。

対して、木谷の夕刊新聞社時代の上司淵野虎三は、「摺みどころのない茫洋とした事業家」として描かれており、他の二人とは若干、タイプが異なっている。しかし、自分の経営する夕刊新聞社を「A新聞社の庇護から離れて独立」させ、「新聞事業を自由自在に大々的にやり始めるという」「壮烈遠大な事業」を「夢見ている」人間でもある。「冗談を装おうと、真剣だろ」と（中略）口に出して言う時は、実際に（中略）その目的に向かって動いている」という淵野虎三は、仕事に意欲的で、つねに前向きに取り組む男である。そのことでは、他の二人の「真物」と、そして木谷と共通している。山根や三原を形容する言葉を借りるとすれば、さしずめ淵野は新聞事業に対する異常な「熱情」の持主とでも言えようか。

このような三人を、木谷が「真物」と見做していることは、木谷が極限まで働きつづけることを要求する男であることを確認させる。彼らの持つ激しい「熱情」こそが、「真物」の最大の条件であるらしい。そして、彼ら三人を「真物」と見做す木谷の背後には、当の木谷こそが、誰よりも「真物」だと考える作者が存在していると言えるかもしれない。

つまり、木谷を中心に据え、山根、三原、淵野らとその周囲に配しつつ、仕事の世界における「真物」とは何か、「真物」の「熱情」とは何かを、井上靖は描き出そうとしたのではないかと考えられるのである。例えば、次の二つの場面には、そのようなモチーフが暗

示的に表現されているように思われる。

一つは、木谷が料亭で大貫敏夫にカルチス宛の手紙を書かせる相談をし、店を出てすぐ後の場面で、木谷の次のような姿が描かれている。

鼻を二、三回くんくんさせながら、木谷はいやに鞆が重いな
と思つた。

「何の花かしら」

そう言いながら、木谷は軽い眩暈を感じて、その時初めて貧血だと気付いた。木谷は暫く道端に屈み込んでいた。

「貧血すると花の香いがしてくるとは妙ですね」

と大貫は、そんな事を言いながら、木谷の傍に立っていた。

時限爆弾を仕掛けた火薬の臭いかなと、その時木谷はふと、自分でもある太々しさを心のどこかに感じながら思った。

そして、いま一つは、カルチスが日本に到着する前日、それを迎えに行く予定の大貫に「オンリー・ワン」の一言を伝えようとする木谷の姿を描いた場面である。ラーネッドの放送を、S日本放送だけの「ただ一回の放送」としてカルチスと契約すべきだと考え、それを大貫に伝えるために夜道を走る木谷の次のような姿が描かれる。

一番海寄りの郊外電車の踏切りを駆け抜けると、漸く道の舗装はとれ、今度はいやにふわふわと和かい感触が靴の下に感じられた。その時木谷は物とすると同時に、軽い眩暈を感じた。

片膝を土の上について、その場に身を屈めた。(中略)

やはりこの場合も、何処かで花の香いがした。それはどうしても幻覚とは思えなく、実際にどこか近くで、初秋の樹木の花が香いを深夜の大気の中に発散し、拡散しているように思われた。

右の二つの場面には、「貧血」、「花」、「爆弾」という、タイトルに関わる言葉が含まれている。そのうち「爆弾」が、世間をあっと驚かせるような、「ちょっと常識を外れた企画」であることを意味しているのは、前後の文脈から想像できる。それに対して、「貧血」による「眩暈」の最中に、木谷が「花の香い」を感じるという描写は、何を表わしているのであろうか。これは少しわかりにくい。青野季吉が「何かおそえおそえのようになっている」描写だと指摘しているごとく、前後の場面に對して、そこだけ浮き上がっているようにも思われる。

しかし、井上靖は、例えば「流転」(昭12・1・3、10)と「2・21『サンデー毎日』」において、料亭から聞こえてくる「酒宴のさざめき」が「花の匂いの様」だと形容しており、また「あすなる物語」(昭28・1)と「6『オール讀物』」では、酒に酔った主人公の鮎太が、夜の闇に紛れて、得体の知れぬ女性と肉体関係を結んだ際、近くで「花の匂いがしていた」と記している。さらに「梧桐の窓」(昭26・11『キング』)では、ヒロインの美也子が恋人の道彦と初めて交わっ

た日の思い出について、「その時の記憶の甘さ」が「夜の底を流れていた何か知らない木の花の高い香り」とともに残っていると描き、加えて、二人が恋人同士だった一年間は、「軽い眩暈めまいに絶えず襲われ続けていた」とも記している。これらを考えると、木谷が「眩暈」とともに感ずる「花の香い」にも、ある種の精神の昂揚や酩酊が託されていると言えるかもしれない。つまり、その「貧血」は、おそらくは過労によるものであろうが、そこに木谷は不快を感じておらず、むしろ心地よい陶醉さえ見出しているのではないかと考えられる。作者はこれらの場面によって、極限状況を厭わぬ木谷の「熱情」を強調し、肯定的に描こうとしているようである。

さて、このような「真物」の男たちは、井上靖の作品に描かれる人物像として、決して珍しいものではない。木谷のごとく、何かに憑かれたように仕事に打ち込む人間の姿を、井上靖は繰り返し描いているのである。例えば、「比良のシャクナゲ」(昭25・3『文學界』)には、解剖学に生涯を賭けた老医学者三池俊太郎を描き、「黯い淵」(昭25・7)と「10『文藝春秋』」には、色彩研究に没頭する図画教師佐竹雨山を登場させ、「射程」(昭31・1)と「12『新潮』」には、終戦直後の混乱の中、闇取り引きに熱中する若き実業家諏訪高男を描いている。そして、同じ小谷正一から材を得た「闘牛」や「黒い蝶」には、闘牛大会の開催に熱中する新聞記者津上と、ソビエトのヴァイオリニスト招聘運動に励むベテニス師三田村伸作を描いている。

「貧血と花と爆弾」も、これらの系譜に連なる作品の一つだと考えられるであろう。ただし、ここで注意すべきなのは、これらの作品の中にあっても、「貧血と花と爆弾」は、主人公らの「熱情」が特に全面に押し出され、より肯定的に描かれていることである。例えば、「闘牛」の場合、闘牛大会に打ち込む津上を描きつつも、その激しい行動を通して、「終戦後一年半」の「時代相」を描くことに作者の意図は置かれていたと考えられ、また「比良のシャクナゲ」では、学問に賭ける三池俊太郎を描きつつ、それが周囲に理解されない孤独感や悲しみが強調されているように思われる。これらに対して、「貧血と花と爆弾」は、「熱情」それじたいを描こうとしているのではないかと考えられるのである。

「真物」という言葉にも示されているように、「貧血と花と爆弾」には、井上靖の理想とする人物像が、具体的かつ直接的に描き出されていると言えるかもしれない。そして、おそらくは、その「真物」を描く上で、小谷正一は最良のモデルだったのであろう。小谷から材を得た三作の中でも、本作品には、井上靖の彼に対する信頼と共感が、とりわけ素直に現れているのではないだろうか。

「貧血と花と爆弾」は、いわば井上靖の人間観を、内なるモチーフを、より自然な形で描き出した作品であり、井上文学解明の一つの手掛かりとして、単なる「実録小説」に止まらぬ特色が認められると考えられるのである。

おわりに

「貧血と花と爆弾」は、題材に寄りかかりすぎた感が強く、また当時濫作期にあった作者の「筆の疲れ」も認められ、井上靖の作品として上々の出来とは言えそうにない。だが、その一方で、物語の前面に押し出された「真物」への「熱情」を通して、井上靖の人間観が感じられ、井上文学解明の一つの手掛かりとなる作品でもある。このいわば「真物」志向は、「闘牛」や「黒い蝶」はもちろん、「黯い潮」や「射程」等の現代小説においても、何らかの形で作品を支える人間観として存在し、それは後の歴史小説にも受け継がれているのではないかと考えられる。例えば、「天平の薨」(昭32・3―8 『中央公論』)の鑿真や、「蒼き狼」(昭34・10―35・7 『文藝春秋』)の成吉思汗などには、歴史を舞台にした「真物」の追求が認められるのではないだろうか。そして、友人小谷正一から歴史上の人物へと進んでいくその過程には、より自由で壮大な空想の舞台を求める井上靖のモチーフの拡大が見られるようにも思われるが、それらの考察は、後の機会を俟たたい。

註

- (1) 「自作解題」(『井上靖小説全集』第九卷(昭48・3、新潮社))および小谷正一「国際興行師の泣き笑い―海外芸能人招聘の黒幕と呼ばれて―」(昭33・4『文藝春秋』)参照。
- (2) 昭27・1・26『産業経済新聞』
- (3) 昭27・2・6『日本読書新聞』
- (4) 昭36・12、毎日放送
- (5) 同番組制作のために行った半年間にわたる取材をもとにまとめた私家版。番組制作時にはまだ存命中だった小谷正一をはじめとする多くの関係者を田村氏は直接取材、事実確認のお墨付きをもらったとのことである。なお、田村氏は『関東民放くらぶ』第40号(平9・5)の「みんなて語ろう民放史」のコーナーに、「メニューヒンの独占放送はこうして出来た」と題する文章を寄稿している。
- (6) 『原善一郎君追憶文集』(昭27・8、原善一郎君追憶文集発行委員)の「略歴」に「昭和二十五年 関西交響学協会創立に当り専務理事に就任」とある。また後出の朝日新聞の死亡記事にも「関西交響楽団専務理事」の肩書きが記されている。
- (7) 『NJBの四年』(昭29・12、新日本放送)、『毎日放送十年史』へ註(4)前出)、『毎日放送の40年』(平3・9、毎日放送)による。
- (8) 昭和二十六年九月九日付『朝日新聞』にも、次のような死亡記事が掲載されている。「原善一郎氏(関西交響楽団専務理事)八日朝、朝日新聞東京本社でメニューヒン氏演奏会について打合せ中、心臓マヒで死去、五十二歳。(下略)」
- (9) 田村氏によれば、メニューヒンの放送用演奏は「東京築地」の「ピクチャーレコードスタジオ」で行われ、「東京―大阪間の中継線」は「極秘」の交渉によって、「進駐軍の中継線」である「A規格七五〇〇サイクル」

を使用できたとのことである。

- (10) 田村氏は次のように書いている。「世界的な一流音楽家を日本に迎えることが出来るその裏には一人の天才的音楽マネージャー―原善一郎の長い努力がその陰にあった(中略)メニューヒンを招くために彼は官庁、総司令部、に精力的に日参する一方ニューヨークに事務所を開いた旧知の音楽マネージャーA・ストロークと何回も交信して漸く実現に漕ぎつけたものだった。(中略)原氏はこの話を朝日新聞に持ち込んだ。その時、橋渡しをした人がアサヒビールの社長、山本為三郎氏だといわれる。(中略)ストロークは山本氏の援助、朝日新聞の後援などにより外国の呼び屋として日本で成功したが(中略)ストロークに対する山本氏の援助は数えたらきりが無い程だといわれる。(中略)山本氏の周辺には常に音楽関係の実力者が集まっていた。(中略)ストロークがはじめて日本にやって来た時から毎日新聞の記者として音楽界に顔の広がった岩崎愛二氏、日本のオーケストラの「夜明け」時代にマネージャーの草分けだった原善一郎氏(中略)岩崎氏は戦時中上海で放送局長をしていたことがある。原氏は新響のマネージャーをしていた時ストロークの連れてきた外国音楽家にソロをやらせ、これとタイアップしたことが縁となり、ストロークの手伝いをするようになった。たまたま日華事変が起こった時、ストロークはアメリカから日本へやって来たが事変下の日本を避けて上海に渡り、また一方原氏は事変後転身してコロムビアレコードに入社したがこれ亦コロムビアの上海駐在となった。かくて上海でストローク・岩崎・原のトリオが偶然顔を揃えることとなった。この時ストロークは仕事がなく、尾羽打ち枯らし生活にも困っていたがこれを原、岩崎両氏が救った因縁がある。(中略)戦後仕事を再開した原氏がストロークと交信した時、恩義を感じていたストロークが懸命にアメリカで動いたことは十分察せられる」なお、「財界の透藤五」は、「上記に見る、

「アサヒビールの社長、山本為三郎」がモデルと考えられるが、作中では遠藤五一が社長を勤めるABC食品がラーネッド放送のスポンサーを担当しているように、実際にアサヒビールがメニューヒン放送のスポンサーであったことを付け加えておく。また、ラーネッドの来日が決定した際、マネージャー、カルチスは「現在上海に居ること」にされているが、これはストロークが「ニューヨークに事務所を開いて」という、田村氏の記述と相違する。おそらく、ストロークが「戦時中上海」にいた事実を取り違えた、井上靖の勘違いである可能性が高い。

(11) 『現代人物事典』(昭52・3、朝日新聞社)には、小谷正一の経歴が次のように紹介されている。「1912(大元)年7月31日兵庫県生まれ。35年早大文学部卒業。36年大阪毎日新聞社に入社。(中略)敗戦後(中略)毎日新聞大阪本社は、傍系の新大阪新聞社を設立し、毎日から黒崎貞次朗編集局長、同次長小谷正一が出向し、46年2月『夕刊新大阪』を創刊した。(中略)47年には(中略)1月『南子闘牛大会』が西宮球場で開催されたが(中略)このいきさつは井上靖の芥川賞受賞小説『闘牛』に詳しい。ここで、闘牛に憑かれて走り回る男のモデルが小谷である。49年パシフィックリーグ設立、50年新日本放送開局、57年大阪テレビ開局も小谷の企画力、実践力が大きくものをいっている。(下略)」

(12) 昭和二十五年十二月十七日付『毎日新聞』でも、「役員さま『新日本放送』の見出しの下に、新日本放送が「スタジオの新築整備、送信所の起工を終わったのを機に十六日午前十一時から大阪の阪急ビル屋上の第一スタジオで創立総会を行」ったことが報じられ、選出された役員の名が掲載されている。

(13) 毎日放送の二十五年史として出版された南木淑朗著のノンフィクション『楊梅は孤り高く―毎日放送の二十五年―』(昭51・9、毎日新聞社)による。

(14) 「舌の長短まで採点 新日本放送アナウンサー試験」の見出しが掲げられ、「新日本放送株式会社では二十五日朝十時から(中略)民間放送アナウンサー採用試験を行った」ことが報じられている。

(15) 昭和二十六年七月九日付『新日本』、テスト放送第一声は「上々」の見出しで、「テスト放送第一声は八日夜十時から三十分間」行われたことが報じられている。

(16) 昭和二十六年十月二十二日付『毎日新聞』掲載の新日本放送広告参照。

(17) 『楊梅は孤り高く―毎日放送の二十五年―』によると、小谷正一は、メニューヒンの放送を成功させた二ヵ月後の二十六年十二月三十一日をもって新日本放送を退社し、かねてから要請のあった新大阪新聞社に復帰したらしい。このラスト・シーンはその事実を活用したものと思われる。註(20)参照。

(18) 山根太郎は、おそらく新日本放送制作総務として活躍した和田精をモデルにしていると考えられる。和田は、『NJBの四年』に「若返った10年・フルに使って」と題する文章を寄せ、入社を勧誘された当初、作中の山根のように「せめてもう十年若かつたら……」と辞退したエピソードを紹介している。

(19) 三原周平、清子の父娘は、おそらくヴァイオリニストの辻吉之助、久子父娘をモデルにしていると考えられる。後の大阪芸術大学教授の辻久子は、『NJBの四年』に「安心して放送し楽しく聴ける局」という文章を寄稿しており、創立期から新日本放送の番組でしばしば演奏していた。また辻久子が、父親の吉之助からヴァイオリンを学び、彼を師としていたことは、『音楽家人名事典』(平8・10、日外アソシエーツ)などに見る通りである。なお、木谷が三原周平から山根太郎を紹介してもらう設定は、事実通りでない可能性が高い。『毎日放送十年史』や『楊梅は孤り高く―毎日放送の二十五年―』には、小谷正一が作家の高田保か

ら和田精を紹介してもらおうエピソードが見られ、特に後者には、山根と三原の關係に「二人の感応が生み出した一点の曇りもない眼に見えぬ玉」を木谷が感じ取った場面と同様の事実が高田と和田の間にあったことが記されている。

(20) 瀨野虎三は、当時の新大阪新聞社社長の瀨戸保太郎をモデルにしていると考えられる。『楊梅は孤り高く―毎日放送の二十五年―』には、瀨戸の要請により、小谷正一が二十六年末をもって新日本放送を退社し、新大阪新聞社に復帰したエピソードが記されている。

(21) 「創作合評」青野季吉、佐藤春夫、中村光夫(昭27・3『群像』)

(22) 「上方踊り」の章、その四に、次のような描写が為されている。「何処か河岸の料亭から、酒宴のさざめきが微かに聞えていた。それさえもほのぼのと花の匂いの中で、―お秋は父親と別れて帰る路、冷たい河岸の夜気の中に突立ったまま、しみじみと、／(もう春だわ) と思った」また、詩「梅ひらく」(昭8・7『日本詩壇』、詩集『北国』(昭33・3、東京創元社)収録)にも、「どこか遠くから微かに饗宴のさざめきが花の如く匂っていた」という句を見ることが出来る。

(23) 「春の狐火」の章で、主人公鮎太は、取材で中国地方の山間部にある、先輩の「春さん」宅を訪れたその夜、酒に酔って、得体の知れぬ女性(実は「春さん」の娘の清香)と肉體關係を結ぶ。その場面に次のような描写が見られる。「鮎太は、女を抱えたまま横に倒れた。線路から半間程離れている丘陵の裾であった。(中略)近くでむせっぽい花の匂いがしていた。鮎太にとっては女の躰というものは初めて経験だった(中略)しかし、すべては極く自然に、彼と相手の女との間に持ち上がったものようであった。大きい花東がいきなり二人の間に置かれ、いっしょにそれにむせて行った感じであった」

(24) ヒロイン美也子の、道彦との思い出について、次のように記している。

「道彦のアトリエを三回目に訪ねて帰る時、美也子はもう処女ではなかった。大切なものを奪られたとも、喪ったとも考えなかった。長身の道彦に半ば抱かれるようにして、母屋の方に気を使いながら広い庭園を横切つて送り出されたその時の記憶の甘さだけが、五月の夜の底を流れていた何か知らない木の花の高い香りといっしょに、いつまでも後に残った。／後で考えてみれば、軽い眩暈に絶えず襲われ続けたとしか思われないう一年だった。小さい箱に、いろんな花がごっちゃんに投げ込まれたように、その一年間にいろいろな事が起った」

(25) 井上靖は、「闘牛」について、「終戦後一年半の、あの時代の日本が、日本の社会が、日本人のすべてが、意識すると、しなずに拘らず、だれも持っていた悲哀」を表現した「時代相を把握した一種の社会小説を意図した」(『闘牛』について)(昭25・2・2『毎日新聞』)と記している。拙稿「井上靖『闘牛』論―材料の意匠化と悲哀―」(『近代文学』試論)第三十四号(平8・12)も併せて参照されたい。

* 井上靖の作品引用は、全て新潮社版『井上靖全集』(平7・4より配本中)による。また、引用文中、旧字体は適宜新字体に改めた。

〔付記〕

メニューヒン独占放送の関連資料について、元新日本放送、毎日放送プロデューサーの田村滋氏に多大なご協力を戴いた。記して、厚くお礼申し上げる。

――たかぎ・のぶゆき、本学大学院博士課程後期在学――